

## 会長就任のご挨拶

梅干野 晁  
Akira HOYANO

日本ヒートアイランド学会会長

このたび、齋藤武雄初代会長の後を受けまして、日本ヒートアイランド学会の会長に就任いたしました。その責任の重さに身が引き締まる思いです。本学会の発足時、齋藤先生から声をかけていただき、この4年間副会長として活動させていただきました。活動していく中で、本学会の設立趣意書にありますように、ヒートアイランド現象の解明・理解とその緩和に向けての活動の意義をますます強く感じるようになりました。と同時に、いろいろな分野の会員の方々と、以下に述べるような従来の学会にない取り組みを模索しながら活動していく中で、自分の研究スタンスも変わっていくのに気づきました。このような活動の機会を与えていただけましたことに深く感謝しております。

これからも本学会の設立趣旨の実現に向けて、齋藤前会長の下に展開されて参りました学会をさらに盛り立てていきたいと思っております。全力を尽くす決意ですので、よろしくお願いいたします。

今日、学術団体としての学会は、学会をめぐる環境の変化や役割の変化への対応が求められています。すなわち、研究成果の発表の場としての研究者の集まりだけでなく、学会がいかにかに会社に寄与できるかが問われています。また、現実には法人化されている学会にあつては、公益法人となるか、一般法人となるかの選択を迫られております。多くの学会がその活動基盤を自問自答している中であつて、日本ヒートアイランド学会は、今日の地球環境時代におけるその存在理由は明快といえます。従来のディシプリン化された学会に対して、学際的、俯瞰的な視点での研究を推進する必要性が指摘される中であつて、本学会はさらにその枠を越えて、学問の基礎・応用から社会への実践までを対象とします。

すなわち、ヒートアイランド現象の解明や理解にとどまらず、脱ヒートアイランド都市・社会を実現するための研究活動を目指す学会としては、従来の学術団体としての学会の主要な構成員である大学等の研究者だけでなく、国及び地方の行政、企業、市民、NPO、NGO等から成る会員の連携が必須です。学会の発足から、本学会は設立趣旨の実現を目指し、従来の学会と異なったユニークな取り組みが実践されてきました。

しかし、この4年間、上記のような活動を実践していく

上で、いろいろ困難な問題にも突き当たりました。全く異なったベクトルを持つ会員が一堂に会する機会を持つことそのものにも問題が生じました。全国大会、委員会の開催日時等、従来のように、ウィークデーの日中というわけにはいきません。そこで、全国大会は土日に開催され、イブニングセミナーはその名のおりアフターファイブに、ノータイでリラックスしながら、お腹も少しふくらませながら、ヒートアイランドについて多面的に勉強しようとする会として合計21回続き、大変好評を博しました。現在、土曜日のアフタヌーンセミナーへとさらに進化させるべく、佐藤公敏副会長の下で計画されております。楽しみにしててください。

会員の平等性と学会の民主的運営、そして学会の安定的・継続的な運営の実現を目指したいと思っております。その第一歩として理事の方々には、企業や民間の方にも参加していただくことにしました。また、今期より3人の副会長にはそれぞれ役割分担をお願いすることにしました。当面学会運営で必要となる総務・財務及び学会誌の出版は阪田升副会長に、Web Journalの発行を含めた学術全般については足永靖信副会長に、そして、企画・全国大会については佐藤公敏副会長に担当していただきます。

現在、会告にありますように委員会が立ち上がり、活動を開始しました。今までは、どちらかという個人的な対応で処理されてきたことが多かったと思いますが、そろそろ委員会組織を充実させ、できるだけ多くの会員の参加によって、学会運営がなされることが望ましいと考えます。

その他、生まれたばかりの学会としては、事務局体制の充実、財政基盤の確保など多くの課題がありますが、会員の皆様のご協力とご理解をお願いいたします。本学会の活動に賛同していただける賛助会員の増強は必須と言えます。委員会をはじめとした学会活動のための旅費等の問題は、学会の財政を考えると困難な状況にはありますが、より多くの会員が参加できるように、皆さんで知恵を出し合っていきたいと思っております。

学会の主要な活動としては、研究成果の公表の場としての論文集の発行が挙げられます。よりスピーディにそしてより広く公表できる方法として、さらに財政面も考慮して、

Web Journal が採用されました。吉田篤正委員長の下にその体制ができあがりました。残念ながら現時点では論文数はあまり多くはありませんが、既に第4巻が発行されています。会員以外の方にも読んでいただけるよう、Web Journal は一般に公開されています。引き続き足永靖信委員長の下で、本学会のユニークさが見えるような Web Journal にすべく、論文審査規定の工夫と内容の充実に取り組んでいただきます。ぜひ、ご意見、ご提案をいただければ幸いです。また、Web Journal は皆様からの論文投稿があって初めて成立します。奮ってご応募いただきますようお願いいたします。

全国大会は、今年で4回目を迎えます。昨年開催された第3回全国大会では、堀越哲美全国大会実行委員長の下で、本学会の目指す方向性の一つである、市民、小中高校の参加が実現しました。特別賞を受賞された多治見北高等学校のヒートアイランド研究の取り組みには、そのレベルの高さに皆圧倒されました。

また、全国大会の場合は単に研究発表だけでなく、ヒートアイランドについて横断的に理解を深めようという主旨で、それぞれの分野で著名な方をお願いしているプレナリー講演は好評を博しております。公募発表もアカデミックセッションだけでなく、行政、企業、民間セッションの発表が増え始めました。ヒートアイランドに関する展示会も今回は10件以上の参加を得ております。着々と本学会の設立趣旨に向けた活動が実現されていると思います。今年は、今までの懸案でありました行政における現場での取り組みをテーマとしたパネルディスカッションが実現します。第1回から共通して最も暑い時期に開催される会場で、白熱した議論が展開されるものと期待しております。

齋藤前会長のときからの懸案事項の一つでもあります「ヒートアイランド対策ハンドブック（仮称）」の出版に向けて、準備委員会を立ち上げました。既に出版社の了解も得られておりますので、早期出版を目指し活動を進めます。こちらについても、ヒートアイランドに興味を持つ多分野の会員から構成された本学会のポテンシャルは高いと考えています。単に出版作業にとどまらず、他のイベントと連携させながら、学会らしいハンドブックができあがることを願っております。

ヒートアイランド現象に関する研究は、ヨーロッパでは既に1800年代の初め頃から見られます。因みに、この時期は我が国では江戸時代の後期に当たりますが、私の研究室で現在進めている江戸時代の街並みを再現して熱収支のシミュレーションをした結果では、膨大な日射エネルギーを受ける日中にはヒートアイランド現象が起きますが、少なくとも熱帯夜を助長する要素は江戸時代にはなかったようです。江戸の街は夜から朝方にかけてはすっと冷えた。

我が国ではヒートアイランド現象は夏よりも冬の方が顕

著に現れることが多く、都心と八王子では7℃近くの差が報告されています。しかし、近年は、夏のヒートアイランド現象とその日常生活への影響が顕在化し、熱中症や熱帯夜による不眠症など、生態系への影響も含め、深刻な環境問題として取り上げられるようになりました。ヒートアイランド現象が東京や大阪をはじめとした大都市における環境問題として、新聞の一面を飾ったことは記憶に新しいところです。現実には、大都市だけでなく、小都市におけるヒートアイランド現象の方が早急に対応すべき課題であると、私は思っております。地方都市の郊外には、自動車社会を象徴するように、水田が埋め立てられ、里山が崩されて、大型施設と共に広大な駐車場が広がっています。ヒートアイランド現象を引き起こす主要因です。すなわち、ヒートアイランド現象の形成要因は、今日の都市や街の構造とライフスタイルにあると言えます。

我が国では、2004年の春、「ヒートアイランド対策大綱」が閣議決定され、具体の対策が国及び地方自治体で動き出しました。そして、今回の全国大会の「行政の取り組み」のパネルディスカッションでも報告されますように、地方自治体でも具体の施策へ展開され始めました。また、民間では、ヒートアイランド対策マテリアルの開発等、ヒートアイランド対策に関する具体的な動きが、急激に進むものと思います。行政や市民の間では街の緑化や省資源・省エネルギー運動が盛んになり、連携できる状況にあります。

本学会が対象とするヒートアイランド研究は、ヒートアイランド現象の解明と理解、健康・人間生活、さらには社会・経済への影響評価、ヒートアイランド現象の予測・評価手法の開発、ヒートアイランド対策のための材料、機器、設備等の開発、環境政策研究など多岐にわたります。

ヒートアイランドという言葉は、市民権を得たようですが、脱ヒートアイランド都市を目指した取り組みはやっと緒についたばかりと言えます。地球環境時代、環境負荷の少ない快適な生活環境の実現のために、本学会の設立趣旨の実践に向けて活動できる場として、魅力あるユニークな学会を目指そうではありませんか。